

イチジクを核とした果樹複合経営 ～時代の変化に応じた作目の選択～

東海市 早川 豊彦さん（豊果園）
果樹（イチジク、ミカン、キウイフルーツ）

【平成 26 年 4 月 21 日掲載】

長年知多地域のイチジク生産を支えてきた豊果園の早川さんを紹介합니다。早川さんはイチジク
の生産技術の確立だけに留まらず、知多イチジクの共同計算方式^(※)による共同販売体制（以
下、共計）が始まった際の部会長として販売面にも大きく関わり、産地の収益力向上に尽力され
ました。現在は地元 J A の理事として地域農業の発展のため、忙しい毎日を送っています。

※ 同品質の農産物価格が、出荷時期や市場に不公平なることを防ぐため、ある一定の期間に出荷された同品質の農産物価格
について、その期間内の平均価格で精算する方式

就農と同時に進めた改植

3 ha を超えるミカン農家に生まれた早川さんは、高校卒
業後に国の果樹試験場（興津支場）での 2 年間の研修を
経て、昭和 51 年に就農します。しかし、就農当時のミカンは
全国的に生産過剰で販売価格の暴落が続いていました。ま
だ 20 歳だった早川さんも危機感を感じ、すぐに販売価格の
高かった‘青島’などの優良系統や極早生に改植します。
さらに成園化するまでのつなぎ作目として植付けから収穫までの期間が短いイチジクの栽培を
開始します。当時は、「ミカンが成園化するまでの補完作目としてイチジクを作ろう。」と考えて
おり、10 年後には完全に撤退する予定でいたそうです。

ところが、ミカンの価格は一向に回復せず、改植したミカンの収穫が始まって大幅な所得の
向上には繋がりませんでした。その為、昭和 56 年には再び一部の園をキウイフルーツへと改植
し、現在のイチジク、ミカン、キウイフルーツの果樹複合経営が確立されました。



早川豊彦さん
剪定を終えたキウイフルーツのほ場で

イチジクの規模拡大と知多共計開始

腰掛けのつもりで始めたイチジク栽培でしたが、豊作年と不作年を繰り返すミカンに比べ販売
価格が安定していたこともあって 25 歳の頃には 60a まで拡大し、産地でも指折りの栽培面積と
なります。

同じ頃、県内では西三河地域が共計を開始したことで安定的なイチジクの出荷が可能となり、
京浜地域における愛知県産イチジクの販路が急速に拡大していました。配荷を担当していた J A
あいち経済連は、「あいちのイチジク」の地位を磐石なものにするため、産地が乱立していた知
多地域にも共計での販売を打診します。当初は、自分達の育ててきた産地を乗っ取られるのでは
と反対していた早川さんでしたが、プライスリーダーであった西三河共計と同じ舞台で勝負がし
たいと昭和 55 年、共計開始を了承します。

販売の面白さ

共計開始に向けた検討会での積極的な発言で関係者から一目置かれていた早川さんは25歳の若さで共計組織の初代部会長に選ばれます。JAあいち経済連の販売担当者とともに何度も京浜の市場に通い、そこで、大産地の出荷物が最初にセリを受ける現実や配荷先の選定や配荷量の調節によって有利販売につなげるテクニックなどを学んだそうです。「販売の面白さにはまって、最初10年間の予定だったイチジク栽培から抜け出せなくなった。」とその当時を振り返りながら語ってくれました。

市場流通のメリット・デメリットを目の当りにした早川さんは、自身の希望小売価格で生産物を販売したいと感じるようになったそうです。そして平成12年、隣町の大府市に大型の農産物直売所「げんきの郷」がオープンしたのを機に、ミカンとキウイフルーツの直売に取り組みます。

そこで驚いたのが、生産者の名前を見て生産物を買う消費者の多さでした。もともと生産物に自信のあった早川さんは、POPなどにも気を使い、再び手にとってもらえるブース作りを心がけました。その結果、平成に入ってから経営内の不採算部門であったミカンとキウイフルーツが再び経営の柱となったそうです。



12月～4月まで農産物直売所「げんきの里」に並ぶ豊果園のキウイフルーツ

産地育成と地域農業の振興

早川さんは、知多ハウスイチジクの部会長としてその技術確立にも長年取り組んできました。温度管理はもちろんのこと、ハウスイチジクならではの水分管理についても養液かん水システムの導入など文字通り試行錯誤を重ね、知多のハウスイチジクを一つのブランドとして定着させてきました。

そんな早川さんが常に心配してきたのがイチジク産地の未来でした。

「産地が潰れても、生産者が残れば産地の再生は可能」と語るように、自分の持てる技術を部会活動の中で惜しみなく提供し、情報共有を図ってきました。また技術面だけでなく、他作目を組み合わせた販売戦略やライフサイクルを考慮した経営戦略の重要性についても部会の中で提案し、部会員の経営力強化を促してきました。

イチジクだけでなく知多農業全体の未来を考えている早川さんは平成23年より地元JAの理事を務めており、「JAの経営をとおして地域の農業を考えて行きたい」と取材の最後に語ってくれました。



収穫間近のハウスイチジク

執筆：農業経営課

取材協力：知多農林水産事務所農業改良普及課